

日本のダダ

神谷忠孝

著者略歴

昭和十二年、北海道帯広市生まれ。北海道大学大学院博士課程中退。中央大学助教授を経て、現在北海道大学教授。

主要著者

「横光利一論」(双文社出版)

「保田與重郎論」(雁書館)

「坂口安吾」(角川書店)

日本のダダ

昭和六十二年九月二十五日 印刷

昭和六十二年九月三十日 初版発行

著者―神谷忠孝

発行者―高橋哲雄

発行所―響文社

〒062 札幌市豊平区美園十二条

四丁目二―二〇

電話 〇一一八三一―七一四六

印刷所―山藤印刷株式会社

製本所―石田製本

定価―一、六〇〇円

日本のダダ

神谷忠孝

日本の
ダダ

目
次

はじめに.....	8
-----------	---

一、ダダイズムとは.....	15
----------------	----

二、日本のダダ運動.....	22
----------------	----

(1) ダダイズムの日本への紹介.....	22
-----------------------	----

(2) 日本におけるダダ運動の展開.....	30
------------------------	----

(3) ダダイズムの波及.....	41
-------------------	----

(4) 「文芸時代」とダダイズム.....	46
-----------------------	----

(5) ダダイズムへの批評.....	54
--------------------	----

(6) 昭和期の動向.....	57
-----------------	----

(7) 戦後の展開―雑誌「ダダ」.....	65
-----------------------	----

(8) ダダ研究の現在.....	70
------------------	----

三、ダダイストたち.....	78
----------------	----

辻 潤.....	78
----------	----

(1) 辻潤のダダ.....	78
----------------	----

(2) 辻潤と女性たち	88
-------------	----

高橋 新吉	98
-------	----

(1) タダ運動と高橋新吉	98
---------------	----

(2) 高橋新吉における「風狂」	109
------------------	-----

吉行エイスケ	119
--------	-----

四、タダの周辺	141
---------	-----

武林無想庵	141
-------	-----

生田 春月	149
-------	-----

島田清次郎	159
-------	-----

林 芙美子	172
-------	-----

坂口 安吾	180
-------	-----

吉行淳之介	192
-------	-----

五、資料編	208
-------	-----

(1) タダイズム紹介の基本文献	208
------------------	-----

享楽主義の最新芸術	208
-----------	-----

ダダイズム一面観……………	210
ダ、主義とは何か……………	214
駄駄主義の研究……………	220
ダダイズムの正体……………	229
(2) アナーキズム系の雑誌一覧……………	235
六、日本のダダイズム参考文献一覧……………	238
あとがき……………	246

日本の ダダ

はじめに

日本のダダ詩は高橋新吉の「倦怠」(「シムーン」創刊号、大正11・4)にはじまるとされている。

倦怠

11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533

倦怠

額に蚯蚓這ふ情熱

白米色のエプロンで

皿をふくな

鼻の巢の黒い女

其処にも諧謔が燦すぶつてゐる

人生を水に溶かせ

冷めたシチューの鍋に

退屈が浮く

皿を割れ

皿を割れば

倦怠の響が出る

この詩は「皿の詩」ともいわれ、いろいろなアンソロジーに収められているが、皿の字の数は二十個、二十四個とまちまちである。初出は二十二個であった。この詩を作るきっかけになったのは、日本で最初にダダイズムを紹介した「享楽主義の最新芸術」（『万朝報』大正9・8・15）の中に、「文字の組方が同じ頁の中に縦に組まれて居たり横に組まれて居たり甚だしきに至つては斜に組まれたりして居て、内容よりも外形に重きを置いて居るやうな傾向があるやうにも見受けられる」と書いてあるのをみて感激したからだ、と、高橋新吉は「日本のダダイズム運動」（『詩学』昭和38・5）で書いている。

この詩が単に西洋のダダ詩の模倣として書かれたのではなく、レストランでアルバイトをしていて、洗い場にもっていくために皿を重ねる労働の中から作り出されたということが大事である。底辺労働者の悲哀とアナーキーな心情が表出していることに注目すると、日本のダダがはじめからアナーキーな気分を内包していたことがわかる。

壺井繁治は『現代詩はどう歩んできたか』（創元社、昭和30・11）の「昭和篇（社会派）」で、この詩のもつ歴史的意味について次のように解説している。

近代社会が生み出した「倦怠」が主題となっているが、その主題のつかみ方、発想、語法は、「民衆詩派」の自由詩とも、またこれまでの象徴的な自由詩ともちがっている。すなわちその第一行には「皿」という文字が二十四も積み重ねられ、次行には「倦怠」という抽象語がぽつんと投げだされ、しかも視覚的に訴える「皿」という文字の積み重ねによって、次行の「倦怠」という抽象語はその重みを一切背負いこみ、「倦怠」そのものとしてのイメージをわれわれに強く刻印する。それは朔太郎の『青猫』^{アシニョ}に見られる象徴主義的倦怠にくらべて、おなじく内部心象を描きながらより現実的でより露出的だ。したがって朔太郎の詩に特徴的に見られる気分象徴にふさわしいメロディアスな、音楽的な言葉と右に引用した詩との間には、ひとつのきわだった断絶がある。それは単に新吉の詩にだけ見られる特徴ではなく、関東大震災前後から日本の詩壇に登場してきたアバンギャルド詩人に多かれ少なかれ共通する傾向であって、「民衆詩派」的な間のびした自由詩の否定や、上田敏以来の象徴詩との訣別は、神原泰や平戸廉吉を先駆とする大正末期のアバンギャルド詩人からはじまったのである。

詩のことはこれぐらいにして、日本のダダが総体的にみて何であったかということに目を向け

ると、石川淳の「ドガと鳥鍋と」(『文学界』昭和37・3)という文章に要領を得た見解がある。石川淳は上野の博物館で催されたルーブル展で、ドガの「取引所にて」という絵の前に人だかりがしているので近づいてみて自分も強くひきつけられ、その理由をいろいろと考えたあげく、それがどうやら「反芸術」という要素からきているのではないかという感想を述べたあと次のように書いている。

反芸術といふことも、作品を事件と見ることも、ことばはいろいろだらうが、今はじまつたことではなかつた。近いために、第一次大戦のあとにダダがおこつてゐる。今さらダダの説明でもあるまい。当時わたしはまだ年少、仕事にもなんにも、芸術の現場から遠いところにふらふらしてゐたが、しかしピカビヤは氣に入らないものではなかつた。わたしは精神……とまではいいない、青二才の生活感情に於ていくぶんはダダのはうに傾斜しかかつたやうなおぼえがある。それでも、ダダの波のあとに置きざりをくつた貝殻の一かけらになつたやうなおぼえはない。今おもへば、それはわたしの個性の抵抗が波をおよぎ抜けたなんぞといふ後生樂ななしではなくて、当時のダダは、すくなくとも日本にまでおよぼした余波のかぎりでは、青二才の生活を巻きこんで行くだけの力すら欠けてゐたといふことになるだらう。よわいエネルギー。はたせるかな、ダダはつひに事件にまで至らないうちに、はなはだ日本化された浮浪現象としておのづから流れ去つた。かういふのは、わたしが後日になつて往年のダダを踏みたふしてゐ

るためではない。反対に、芸術上の可能を遠望させることに於て、ダダは当時の日本の芸術にむかつて発明奨励の掛声といふぐらゐの栄養学的刺戟はあたへたのではないかと、わたしは今日なほ高く買ひかぶるはうにかたむいてゐる。

ここに石川淳の文章を掲げたのには理由がある。つまり、従来のダダの扱い方が近代詩史、近代絵画史の一コマとして処理されがちであつたが、現代文学史の中に分け入つてみると、ダダの波紋は詩や絵画にとどまらず小説の方にまで及んでいたという事実の裏づけになると思えるからである。

具体的には昭和文学の起点となつた新感覺派文学の文章革新は、それまでの自然主義的リアリズムへの挑戦としておこつたわけで、ダダの影響は無視できないのである。さらには、昭和初年の新興芸術派についても、従来の新感覺派の亜流という見方では不十分である。「エロ・グロ・ナセンス」という新興芸術派の特徴も大正末期のダダ運動の延長上で考えることで、そのねらいとしたところがみえてくる。ダダ運動に参加した最年少の吉行エイスケが、昭和に入つて詩から小説に転じ、龍膽寺雄とともに新興芸術派の旗手と目された時期があつたことも注目して見る必要がある。

杉山平介の「ナンセンス文学検討」(「三田文学」昭和5・6)は井伏鱒二や中村正常をナンセンス作家と命名した当時のジャーナリズムにひっかけて風来山人やエドガ・アラン・ポオなど東

西の文学にみられるナンセンスをひきだしたおもしろい文章で、その中に次のようにある。

ナンセンスはナンセンスだ。無意義だ。背理だ。それが故に真実なのである。

近頃流行の堅苦しい「合理性」、厳肅な緊張面、悲壯面、さういふものが或程度に持続すると、次第に真実性を失つて、堪え難い偽瞞的なポーズとして我等の感性を圧迫してくる。その時、最もナチュラルにナンセンスに対する渴望が爆発する。

私はダダイズムを統一的傾向の、補助的な一翼として解してゐるものであるが、同じやうにナンセンスに対する我等の要求を、合理的運動の補助的な一翼と解するものである。すなはち、そこに無用の用を認めるものである。

ここでダダイズムが視野に入っていることに注目すると、昭和の新興芸術派の一部、あるいは牧野信一や坂口安吾の文学、特に安吾の「FARCE に就いて」「青い馬」昭和7・3）における文学観もダダイズムあたりに源流があることが確認できるのである。さらには石川淳、坂口安吾、太宰治などの文学的出発にどのようにダダイズムが作用したかをさぐることによって、いわゆる「無頼派」「新戯作派」との関連があきらかになってくると思われる。

高見順や原民喜、評論家の青柳優などが若い時代にダダイズムに傾倒したのはよく知られていることだが、それが作品の中にどうかたちであらわれているかということも興味ある問題で

ある。ひとつの見方として、昭和前期を見舞った十五年戦争下で、かろうじて文学精神を保持し得た文学者たちには、石川淳や坂口安吾、高見順などの作品にみられるように、諧謔と韜晦を駆使しての文学的抵抗がみられること、その底流にダダの影響があつたといふこともできるのである。

戦後文学における前衛運動は花田清輝や安部公房によって推進されるのだが、そこにもダダの精神は生き続けており、サルトル、カミュの思想が実存主義文学といふかたちで戦後文学にひとつの流れをかたち作るに際しても、ダダの復活が認められる。吉行淳之介が同人誌「葦」二号（昭和22・12）にG・リブモン・デセーニュの「ダダの歴史」（岡田弘訳）を載せたことは吉行文学とダダを考えるうえで大事な要素である。尾辻克彦（赤瀬川原平）が一期ネオ・ダダの運動をおこなしたことも含めて、戦後文学にダダがどのように生き続けているかといふことも考察に値するテーマである。ひとまず、日本のダダ運動の基礎的な検証といふかたちで、本書を世に問うてみる。

一、ダダイズムとは

1

一九一六年、スイスのチューリッヒではじまったダダ運動から五十年目に、雑誌「本の手帖」五十八号（昭和41・10）は「特集・ダダ50年」を組んだ。そこに寄せられた諸氏の見解を通して、ダダとは何かについて整理してみよう。針生一郎は「ダダと現代」で、ダダが絵画、音楽、映画などの分野で脈々と生きつづけていることを確認したうえで、トリスタン・ツアラやフリー・バルの文章から、次のような見解をひきだしている。

大戦前のベル・エポックに生れた立体派、未来派、表現派などには、多かれ少なかれ機械文明の進歩と都市生活の変化にたいする、オプティミスティックな肯定がつきまとっている。アポリネールは機械文明と合理精神の背後に明るい虚無をのぞきこむことによって、この時期の代表的な詩人となった。だが、ダダには近代的なもののすべてにたいする、懷疑と反撥が底流している。かれらは過去の呪縛をたちきったばかりでなく、未来にむけての進歩の観念を否定し、純粹な現在にたちむかった。